

# 小学校国語教科書教材「浦島太郎」採録の変遷

Changes in the Inclusion of the Story of Urashima Taro in Japanese-Language Educational Materials for Primary Schools

中 嶋 真 弓  
NAKASHIMA, Mayumi

## 1. はじめに ～研究の目的と方法～

2011年度から全面実施となる小学校学習指導要領（以後学習指導要領の引用は全て、文部科学省『小学校学習指導要領解説国語編』2008.8.31による）には、小学校古典教育の充実を図ることが打ち出されている。具体的には、今まで「言語事項」とされていた事項が「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」となり、そこに「ア 伝統的な言語文化に関する事項」が位置付けられている。内容は、以下のようである。

### ・第1学年及び第2学年

(ア) 昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること。

### ・第3学年及び第4学年

(ア) 易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること。

(イ) 長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと。

### ・第5学年及び第6学年

(ア) 親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること。

(イ) 古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること。

第1学年及び第2学年では、「昔話や神話、伝承」に親しむことによって、「伝統的な言語文化に触れることの楽しさ」を実感させることを大切にしている。

「昔話」では、一般的に五大昔話が有名であるが、「浦島太郎」は、波多野完治のことは<sup>1)</sup>を借りれば、『浦島太郎』は、日本五大昔話（桃太郎・花咲爺・かちかちやま・猿蟹合戦・舌切雀）とならんで名高いお話です。五大昔話は、室町時代の末ごろから江戸時代の初めご

ろにかけて作られたわりに新しい話ですが、『浦島太郎』は、それよりはるかに古い奈良時代にまとめられた『日本書紀巻第14・雄略天皇紀』『風土記逸文』『万葉集第九』等に水江浦嶋子として、その話のものがしるされてあります。」というように、古くから伝わる日本の昔話であり、古典につながる学習材として小学校古典教育導入に伴って今後学校現場でも活用されるのではないかと考えている。

「浦島太郎」は、小学校現行教科書には見ることはできないが、国定国語教科書や昭和20年代の検定教科書には多く採録されている。昭和22年に出された学習指導要領で「古典軽視」<sup>9)</sup>の風潮がある中で、奈良時代の古典に記されている「浦島太郎」が採録されているあるいは、採録形態を変えながらも戦前・戦中・戦後という激しく変動する社会情勢の中にありながらもなお教科書に位置付けられ続けたということは、この学習材が担う何かがあったと考えられる。それは、一体何であろうか。これを検証することは、今後の昔話教材の在り方を考えていく上での一助となるものと考えている。

そこで、本小論は以下の2つの観点から、教科書教材「浦島太郎」の教材採録の変遷を分析して、「浦島太郎」が担う時代の役割について考察していくものである。

〈観点1〉国定国語教科書第1期～第6期（以後〔国定1〕、〔国定6〕のように記す。）及び昭和28年発行までの検定教科書に採録されている「浦島太郎」の変遷を分析する。なお、対象とした教科書は、〈表1〉のものである。また、昭和28年発行までとしたのは、学習指導要領第1期改訂期<sup>9)</sup>によったもので、昭和22年・26年の「学習指導要領国語科編（試案）」をもとに発行された教科書を対象としたためである。

〈観点2〉大正11年～昭和28年に発行された「浦島太郎」の絵本について、教科書教材との相違点を整理し、子ども達が日常生活で読んでいる絵本と学校での教科書教材での学びとの差異を検証する。なお、対象とした絵本は、国際子ども図書館所蔵の18

〈表1〉 国定国語教科書から昭和28年度までの「浦島太郎」採録教科書一覧

発行者	教科書番号等	M37～42	M43～T6	T7～S7	S8～S15	S16～S20	S21	S22	S23	S24	S25	S26	S27	S28
〔国定2〕	尋常小学読本巻三		尋常小学読本巻三											
〔国定3〕	尋常小学国語読本			尋常小学国語読本										
〔国定4〕	小学国語読本				小学国語読本									
〔国定5〕	よみかた三					よみかた三								
〔暫定〕	よみかた3-2						よみかた3-2							
〔国定6〕	こくご4							こくご4	→					
〔日吉〕	260												260	→
〔大野〕	142・1-129											142	→	1-129
〔学図〕	242・278												242	278
〔二葉〕	214											214	→	
〔二葉〕	197													197
〔光村〕	108・187											108	→	187 →

冊<sup>9)</sup>である。

## 2. 教科書教材「浦島太郎」の採録状況

「浦島太郎」が、国定国語教科書に初めて採録されたのは〔国定2〕「尋常小学校読本巻三」である。この教科書の中には25課が位置付いているが、最後に「24 ウラシマノハナシ（一）」「25 ウラシマノハナシ（二）」として採録されている。内容は、次の①から⑧からなっている。「①海辺で子ども達がかめをいじめている。②かわいそうに思った浦島は、かめを買い海へ放す。③二三日後釣りをしている浦島の前にかめがあらわれ、助けたお礼に竜宮城へ連れて行ってもらうことになる。④竜宮城には乙姫がいて、そこで御馳走を食べたり色々な踊り・遊びを見たりしながら時を過ごす。⑤ここでの生活に飽きてきた浦島は家に帰りたくなる。⑥乙姫は別れを惜しむが、「決して開けてはいけない」と言って玉手箱を土産に渡す。⑦村に帰っても父母、家もない。友達や知人もいない。⑧玉手箱を開けてみると白い煙が出て浦島はおじいさんになってしまう。（筆者補：波線部分は、後述の分析内容に關係する部分）。この展開は、「浦島太郎」の一般的に伝えられているものである。なお、以後この①から⑧までのストーリーを基本として述べていくこととする。また、①②の番号は、このストーリーの番号とする。

この〔国定2〕から昭和28年度使用開始教科書で「浦島太郎」を採録しているものを〈表1〉に示したが、次に、それぞれの教科書の特徴を下記のような項目から、〈表2〉～〈表4〉に整理してみた。

### （1）項目1：採録形式と単元名

採録形式においては、〈表2〉に示したように、「劇」「紙芝居」「物語文」の3つでの提示であった。〔国定5〕を境に、文部省教科書の形式が様変わりしていることが分かる。「物語文」での提示であったものが「劇」にかわりそれに伴い〔大書142・1-129〕〔光村108・187〕では、「紙芝居」の形式をとっている。「劇」の形式をとることによって、会話文が増加、すなわち文章の分量が多くなり、より内容提示が具体的に記されるようになった。

例えば、竜宮城から去る場面では、〔国定4〕と〔国定5〕では、次のような違いが見られる。

〔国定4〕「しかし、そのうちに、おとうさんやおかあさんのことをかながへると、家へかへりたくなしました。そこで、ある日、おとひめさまに、『どうも長くお世話になりました。あまり長くなりますから、これでおいとまをいたします。』」

〔国定5〕「うらしまは、父や母のことを思ひ出して、急に家へかへりたくなりました。『たひのことば）これは、まださしあげたことのない、おいしいごちそうでございます

〈表2〉 採録形式・採録箇所

発行者	番号等	採録形式			採録箇所				
		劇	紙芝居	物語文	一般	最終無	いじめ場面	亀をいじめる場面無	部分
[国定2]	尋常小学読本巻三			○	○		▲		
[国定3]	尋常小学国語読本			○	○		▲		
[国定4]	小学国語読本			○	○		○		
[国定5]	よみかた三	○			○		○		
[暫定]	よみかた3-2	○			○		○		
[国定6]	こくご4	○			○		○		
[日書]	260			○		○	○		
[大書]	142・1-129		○		○		○		
[学図]	242・278	○						○	
[二葉]	214			○	○		▲		
[二葉]	197			○	○		▲		
[光村]	108・187		○						○

す。』『(うらしまのこぼ) いや、もう十分いただきました。』『(えびのこぼ) では、にぎやかなをどりをして、ごらんにいませう。』『(うらしまのこぼ) をどりもたくさんです。』『(おとひめのこぼ) それでは、何かかはったことをして、おなぐさめいたませう。』『(うらしまのこぼ) いや、おとひめさま、何もかも、もう十分でございます。長い間、ほんとうにお世話になりました。』『(おとひめのこぼ) どうかなさいましたか。』『(うらしまのこぼ) あまり長くなりますので、もうおいとまいたします。』『(おとひめのこぼ) まあ、よろしいではございませんか。』『(うらしまのこぼ) でもうちのことも気にかかりますから、かへらせていただきます。』

また、会話以外の文章もより充実し、[国定5]と[国定6]では、同じ劇の形式を採用しているが、より[国定6]のほうが、動作がより具体的に描きやすくなっている。子ども達にとっては、幼い頃に読んだ「浦島太郎」を演じたりしながら親しむとともに、この活動を通して話す力を付けていくという面において、教材の役割に変化が見られると言える。対象教科書のうち「学習の手引き」があるものが[日書260][大書142・1-129][学図242・278][二葉214][二葉197]であるが、[学図242・278][二葉197]を見ると、これらの内容から教材に何を求めているか見ることができる。なお、[日書260]については、後述する。

[日書260]

○どうして、うらしまはりゅうぐうでたいくつしたのでしょうか。

[大書142・1-129]

(二) かみしばいのえをみながら、うらしまたろうのおはなしをしてごらんさい。

[学図242・278]

○もんだい

1 どうしたらげきがうまくできるか、かながえてみましょう。自分たちのきょうしつですときには、「むかしむかし」のうたは、やくをもっていない人が、自分のせきでうたうといいでしょう。こうどうなどで、おおぜいのまえですときには、うたいてをきめて、ぶたいのわきの、ピアノのまわりでうたうといいでしょう。

2 うたとことばとすることと、よくあうように、きをつけなさい。

\*さらに、本教科書の単元の目標や教師の指導の在り方について触れた最終頁には、次のようにある。

劇教材として、音楽と対話と動作を組み合わせる努力を養う。

(一) 対話だけの劇から進んで、「せりふ」と「しぐさ」を入れた歌劇的な演出を指導する。

(二) 読む、話す、聞く、作る、動作化する諸能力をねる。

[二葉214]

1 このお話を紙しばいにつくってみましょう。

2 このほかのむかし話をしらべてみましょう。

[二葉197]

○おけいこ

1 おもしろいえにつきをかきましょう。

2 きいたおはなしや、よんだおはなしのあらすじを、かいておくのは、たいへんよいことです。

3 くれよんは、はっきりとしたいろでぬりましょう。

上記の手引きの内容を見ると、紙芝居や劇の「やり方」「作り上げる時の注意事項」というように、他教科でも通用する内容が書かれている。その中で、[二葉214] [二葉197]には、「このほかのむかし話を……。」「読んでお話のあらすじを書いておく。」というように、読書につながる働き掛けがなされている。

単元名・教材名の提示では、ほとんどの教科書が教材名を「浦島太郎」としている。単元名・教材名がしっかりと位置付いているのは、[二葉214]「むかし話 うらしまたろう」、[二葉197]「えにつき うらしまたろう」である。単元名では、大きく3つに分けることが

できる。①題名 ②ジャンル ③学習活動の一つ ②では、「昔話」とジャンルで提示している。③では、「えにっき」は、お姉さんの学級が浦島太郎の劇をしたことを絵日記に書くという体裁をとっている。「せんせい」では、「先生が子ども達に紙芝居をする」という設定となっている。この教材では、「浦島太郎」が「カメに乗って竜宮城へ行く場面」「踊りを見ている場面」の2つのみ採録されている。特にこの教材では、子ども達の生活体験の中で読んで得た「浦島太郎」のお話に寄り添って、「全体像は知っている」という捉えの中で展開されているように思われる。「浦島太郎」は、「子ども達に親しまれ、読まれている」ことを前提に学習がなされているのである。その他は、教材名として「ウラシマノハナシ」「うらしま太郎」「浦島太郎」「うらしまたろう」の4種類の表記がある。

## (2) 項目2：採録箇所

前述した①から⑧までの内容を網羅した作品を一般的とした場合、〈表2〉にあるような採録箇所の傾向が見られた。文部省によって発行された教科書においては、全て①から⑧までの一般的な内容が網羅されている。しかし、発行3社においては、次のような箇所に違いが見られた。

- ◇ [日書260]：⑦⑧がなく、乙姫と別れ、村に帰る場面で終わっている。
- ◇ [学図242・278]：①②がなく、助けてもらったカメの登場から始まっている。
- ◇ [光村108・187]：①②⑤⑥⑦⑧がない。

提示方法では、最初と最後に次のような内容を取り入れているものもある。

[国定5]・[国定6]・[暫定]は、⑧の玉手箱を開けた場面を、次のような七五調で表現している。

生まれた 村に かえったら、だれも 知らない 人ばかり。  
 とほうに くれた うらしまは、あけて みました、たまたまばこ。  
 白い けむりが たちのぼり、元気で わかい うらしまは、  
 みるみる しらがの おじいさん。 むかし むかしの 話です。

また、[学図242・278]は、劇の形式であるが、最初と最後に文部省唱歌「浦島太郎」を位置付けている。多様な学習材を組み合わせた教材提示・活動の幅の広がりを感じるとともに、日本の伝統文化に幼いうちから親しませておく工夫が教材の提示にも見られる。

## (3) 項目3：採録内容・表現の在り方と挿絵

採録内容や表現について、いくつかの観点から整理したものが〈表3の1〉〈表3の2〉で

ある。

〈表3の1〉 採録内容

発行者	番号等	(b) カメを助ける (お金の叙述)	(c) 月日の叙述	(d) 村に帰る理由				
		有○・無×		両親のことを思い出す	家のことが気にかかる	働きたくなる	家に帰りたいくなる	家でも心配している
[国定2]	尋常小学読本3巻	○					○	
[国定3]	尋常小学国語読本	○					○	
[国定4]	小学国語読本	○		○				
[国定5]	よみかた三	○	三年	○	○			
[暫定]	よみかた3-2	○	三年	○	○			
[国定6]	こくご4	○		○	○			
[日書]	260	○				○		
[大書]	142・1-129	○					○	
[学図]	242・278							○
[二葉]	214	○					○	
[二葉]	197	×					○	
[光村]	108・187							

(a) いじめ場面について

〈表2〉の採録箇所記した「いじめの場面」で、○印はいじめの部分詳しく描いているもの、▲印は簡単に触れているものとした。「いじめ」の叙述については、以下のような特徴がある。

- [国定2]：オモチヤニシテキマス      [国定3]：おもちゃにしてゐます
- [国定4] [日書260] [二葉197]：いぢめてゐる（いじめている）
- [国定5] [暫定] [国定6] [大書142・1-129]：かめをころがして
- [二葉214]：つかまえてあそんで

「いじめ」という叙述が最初に使われたのは、[国定4]である。この「いじめ」について、[学図242・278]には、単元の目標や教師の指導の在り方について触れた最終頁に（備考）として次のような文言が見られる。

（備考）この話のはじめにある、こどもがかめをいじめているのを浦島が助けるところは、省略したが、それを一幕に入れてもよい。ただし、かめをいじめるところ

が、あまりざんこくにならないようにしたい。

[学図242・278]では、このような考えもあり、「いじめ」の場面は削除されているのである。

#### (b) カメを助ける場面について

浦島は「カメを子ども達から助けるために」子ども達からカメを買い取るという叙述が、ほとんどの教材で見ることができる。後述するが、出版された絵本にも、この叙述はほとんどの作品にあり、そのような叙述がなくても、挿絵から浦島がお金を支払おうとしている様子を見て取ることができる。

#### (c) 月日の叙述について

浦島が竜宮城に3年いて地上に戻ってきたら300年が過ぎていたというのがよく知られているが、時間的な内容に触れているのは、[国定5] [暫定]のみで、これらの教科書は、竜宮城での生活を「三年」としている。子どもの中には、絵本を読んでいて「竜宮城に3年いた」とか、「本当は300年もたっていたんだ」という者もいると思われる。今後学習材として「浦島太郎」を活用する場合、絵本や他の作品と比較しながら、竜宮城と地上との時間のギャップや不思議さ、現実に戻った浦島の驚き等を、より豊かに想像させていくことも楽しい授業づくりにつながると考える。

#### (d) 村に帰る理由について

村に帰る理由やきっかけとしては、「家に帰りたくなる」「両親のことを思い出す」「家のことが気にかかる」「働きたくなる」「家でも心配している」の5つの理由を読み取ることができる。

さらに、理由において、次のような叙述や挿絵が見られる。

#### ◆帰る理由

##### ◇教訓的なもの

・[国定2]:ウマイゴチソウモ毎日タベルト、シマヒニハイヤニナリマス。オモシロイアソビモ毎日見ルト、シマヒニハアキテキマス。

\* [国定2]も「ウチヘカヘリタクナツタカラ」とあるが、その前に上記に示した「ウマイ……」の文章が位置付いている。「アキテ」という表現は、この教材にのみ見られる。

・[日書260]:うらしまは、りゅうぐうにきてからは、はたらくしごとがないので、毎日、のんきにあそんでいました。ところが、しばらくたつと、うらしまは、だんだんたいくつしてきました。(中略)はたらかないでいると、どんなにおもしろいことでも、だんだんつまらなくなってくるのだ。うらしまははじめて、気がつきました。気がつくときゅうにうちへかえって、働きたくなりました。



- \* [日書260] の「学習の手引き」に「○どうして、うらしまはりゅうぐうでた  
いくつたのでしょうか。」とあることは前述したが、この手引きの内容は、  
本文中にこのような教訓的な内容があるために、ここに視点をあてて問うた  
ものと思われる。

◇自分の意思でないような表現

- ・[学図242・278]：(浦島)「ちょっと帰ってきます。」  
(乙姫)「そうですか。では、すぐまたきてください。」  
(浦島)「すぐ、また、きますから」

◆挿絵

- ・[日書260] 退屈そうに頬杖をついて、怒っているような表情の挿絵

浦島太郎が「村に帰る」理由として、「家に帰りたい」「家が気になる」「両親が心配」というのに対して、「働きたくなる」「家でも心配している。すぐ帰ってくる」というものもある。「働きたくなる」というような教訓的な内容で、「働くことの大切さ」を子どもに植え付けるとく叙述されている。一般的な昔話に慣れた子ども達にとっては、意外な理由であり、新たな発見として受け入れられるように思われる。他の手引きの内容が紙芝居や劇の「仕方」や「ストーリー展開を話し合ってみよう」という内容とは大きく異なっている点においてもこだわりが分かる。また、「他者が心配している」「また戻ってくる」というように乙姫に取りなそうとする調子のよい楽観的な浦島太郎の姿も見る事ができる。体裁を繕おうとする、そして、今の楽しい生活を維持していきたいという人間の願望をそこに見ることが出来る。

教訓的な表現について、安倍秀雄が、絵本の解説の中<sup>9)</sup>で「お伽噺に教訓を入れる事はいけないといふ人がありますが、それも程度問題であります。(中略) 児童をして自然に、なるほどと思はしめるやうな程度なら、ちつとも差支ないと思ひます。」と述べている。戦後教科書にイソップ物語が多く採録されていたが、それらとの関わりにおいても、国語の力を付けるためにどうあるべきかということから考えていく必要があるだろう。

(e) 玉手箱を渡す場面について

玉手箱を渡す場面では、全て乙姫が「何があっても開けないように」と忠告する内容である。場面で乙姫のことばがないもの、少しニュアンスが違う表現は以下のようなものである。

- ・[日書260] [二葉197]：玉手箱をもらう場面はあるが、乙姫のことばはない。
- ・[学図242・278]：「玉手ばこは、こんどここにくるまでは、おあけになつてはいけませんよ。」

(f) 村での様子について

村に帰ったときの様子では、詳細に書かれているものと簡単に扱っているものがある。それぞれの教科書の叙述に沿って次のように整理してみた。

〈表3の2〉採録内容

発行者	番号等	(f) 村での様子		(g) 玉手箱を開ける思いや様子				(h) 両親・家族の叙述	(i) 浦島・乙姫の登場	
		説明程度の記述	詳しく記述	途方に暮れて	さびしくなっている	かなしくてたまらない	あけると何か分かる		浦島	乙姫
[国定2]	尋常小学読本3巻	○				○		父母		お伊勢守
[国定3]	尋常小学国語読本	○				○		父母		
[国定4]	小学国語読本	○					○	おとうさん		
[国定5]	よみかた三	○		○				父母		
[暫定]	よみかた3-2	○		○				父母		
[国定6]	こくご4	○		○				父母		
[日書]	260							叙述無し	なつおのり	うつくしおのり
[大書]	142・1-129	○			○			叙述無し		
[学図]	242・278		○		○		○	叙述無し		
[二葉]	214	○				○		父母		
[二葉]	197	○				○		叙述無し		
[光村]	108・187									

- ・[国定2]：家に帰る→父母×→自宅×→友達×→知人×（筆者補：「×」印は、ない、あるいはいなくなっていることを意味する）
- ・[国定3]：家に帰る→父母×→自宅×→村変化→知人×
- ・[国定4]：浜辺につく→村変化→自宅×→おとうさん・おかあさん×→知人×
- ・[国定5]：村に帰る→知人×（七五調での叙述）
- ・[暫定]：村に帰る→知人×（七五調での叙述）
- ・[国定6]：村に帰る→知人×（七五調での叙述）
- ・[大書142・1-129]：村に帰る→知人×
- ・[日書260] [光村108・187]：村に帰る場面はない。
- ・[学図242・278]：いつもの目印一本松→村変化（家・道）→人に尋ねる
- ・[二葉214]：父母×→村変化→知人×
- ・[二葉197]：家に帰る→知人×

[学図242・278] で、人に尋ねる場面が登場する。分量的に、他のものと違いかなり長くなっているのが特徴である。これらの叙述によって、浦島太郎がいなくなった時の状況や困惑する浦島太郎の様子をより具体的に感じ取ることができると言える。

#### (g) 玉手箱を開ける思いや様子について

玉手箱を開ける思いや様子は、叙述から4つの内容に分かれる。

島内景二は、玉手箱を開けた理由について「他人が無理矢理開けさせた（福井県など）、

孤独と悲しさに耐えられず開けた（福島県など）、何か手がかりが得られるかと思って開けた（石川県）などあるのだが、どれもこれも不自然さは否定できない<sup>9)</sup>としている。これらの内容を比較していくと、伝承文学の特徴や昔話の色々について子ども達は興味をもちながら学ぶことができるようになり、学び方を学ぶことができるよい機会となると考える。

#### (h) 両親・家族の叙述について

両親についてどのような叙述がなされているかを、下記のようにまとめてみた。

- ・[国定2] [国定3] [国定5] [暫定] [国定6] [二葉214]：父母
- ・[国定4]：おとうさん・おかあさん
- ・[日書260] [大書142・1-129] [学図242・278] [二葉197] [光村108・187]  
：叙述ない

また、(f)「村へ帰った様子」から、父母の叙述を見てみると、[国定5]を境に、戦後は両親の叙述が[二葉214]以外見られない。いずれにしても、この叙述の有る無しによって、「両親の存在が曖昧で一人暮らしかもしれない・両親を養って暮らしているかもしれない」「両親と暮らしている」という浦島の背景を子ども達も感じ取ることができるであろう。

#### (i) 浦島・乙姫の登場の仕方について

浦島の紹介は、多くの場合浦島が漁師であるという職業の説明がなされている。その中で、浦島の人間性について触れたものは[日書260]だけで、浦島を「うらしまという、なさけぶかいりょうしがいました」としている。

乙姫の紹介では、「うつくしいおひめさま」というように乙姫の容姿を形容する叙述と「おとひめさまが出ていらっしゃいました」という動作のみを紹介する場合の2通りある。

#### (j) 挿絵について

挿絵について、〈表4〉に整理してみた。

戦後になり、挿絵においても多く取り入れられていることが分かる。特に[国定6]では、各場面に提示されており、子ども達が絵を楽しみながら読むことができるようにしていることが分かる。

### 3. 絵本「浦島太郎」の特徴

第2章では、教科書教材「浦島太郎」の採録状況を見てきたのであるが、本章では、大正11年から昭和28年に発行された絵本「浦島太郎」について、特に教科書教材の叙述と違う部分を取り上げてみた。

昔話「浦島太郎」は、現代の子ども達にも親しまれ、多くの子ども達があらすじを言える昔話の一つと言えよう。

これは、昭和20年代にも言えることではないだろうか。祖父母や両親から話を聞いたり、自分で絵本を読んだりしたことであろう。子どもの中には、家で聞いたお話、または自

〈表4〉「うらしまたろう」挿絵一覧

発行者	番号等	挿 絵 の 内 容															
[固定2]	尋常小学読本 巻三	子どもと浦島														竜宮城を後に	
[固定3]	尋常小学国語 読本	子どもと浦島					竜宮城の 全体									竜宮城を後に	
[固定4]	小学国語読本	子どもと浦島					竜宮へもうす ぐ到着						踊りの様子				玉手箱・老人
[固定5]	よろかた三	子どもと浦島							乙姫1人 の立ち姿				踊りの様子				玉手箱・老人
[暫定]	よろかた3-2	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/
[固定6]	こくご4	子どもと浦島		亀と浦島	海辺の様子 (2枚)	亀と浦島(竜 宮へ近づく)				乙姫との挨拶	乙姫との食事				乙姫たち との別れ	果然と佇む	
[日登]	260	子どもと浦島		亀と浦島	海の中(亀 と浦島)	竜宮全体				乙姫との食事(ら まつまんさそう)	踊りの様子			乙姫たち との別れ	竜宮を後に (亀と浦島)	/	
[大登]	142・1-129	亀をいじめ る子ども	子どもと浦島	亀を逃が す浦島	亀と浦島	海の中(亀 と浦島)			乙姫との挨拶		踊りの様子	玉手箱をもら う		竜宮を後に (亀と浦島)		玉手箱・老人	
[学園]	242・278	/	/	/	亀と浦島	海の中(亀 と浦島)	竜宮全体			乙姫との食事	踊りの様子	玉手箱をもら う			果然と佇む (2枚)	玉手箱・老人	
[二葉]	214				亀と浦島						食事・踊りの 様子					玉手箱・老人	
[二葉]	197		子どもと浦島								踊りの様子					玉手箱開けようと する→玉手箱・老人	
[光村]	108・187		子どもと浦島			海の中(亀 と浦島)					踊りの様子	/	/	/	/	/	

分で読んだお話が学校で学ぶものと違っていれば、より興味をもち、その違いについて考えたり教師に尋ねたりするだろう。

教科書教材「浦島太郎」と子ども達が生活の中で手にした絵本「浦島太郎」とを比べることは、今後の昔話の指導における絵本活用の在り方にもつながると考える。

この章では、第2章で見た教科書教材との相違点を次の4項目から見ていくこととする。なお、ここで①⑩と記す番号は、注4にある絵本番号とする。

### （1）ストーリーの違いについて

第2章の冒頭で、「浦島太郎」のストーリー展開の一般的なものを示したが、①のみ展開が他と大きく違っている。①の概要を大まかにまとめると次のようである。

- ・浦島が、竜宮城へ来て2年目から物語はスタート。浦島の紹介は、「浦島は、丹後国、水の江村の若い漁夫でした」とある。
- ・竜宮城での生活を「退屈で仕方がない」「陸にいるときは、毎日家業に追われ」としている。
- ・10年に一度の夢の神との出会いがある日に、浦島は村の様子を夢で見る。自分がカメを助けたときのようにその夢では、浦島の妹おなみが、子ども達からいじめられているカメを助ける。夢から覚めた浦島は村に帰ることとする。

この絵本を読んだ子ども達は、一般的なストーリーとの違いに、少し戸惑うのではないだろうか。

ストーリーではないが、②⑤⑩は、カメを助けた話を両親にする場面がある。それに対して父：「ソレハヨイコトヲシタ」母：「ホントウニオマヘハシンセツダコト」としている。また、同絵本は、冒頭での浦島の紹介として、「漁師、両親を養う、優しい人達、いつも楽しく暮らしていた」として、浦島だけでなく家族の様子まで記している。

絵本でも、教科書同様、両親がいる場合と一人である場合との両方がある。

### （2）村に帰る理由の違いについて

「村に帰る」理由として、教科書では「家に帰りたくなる」「両親のことを思い出す」「家のことが気にかかる」「働きたくなる」「家でも心配している」の5つであった。ここでは、それ以外のものを挙げておく。

絵本では、教科書発行1社しか見られなかった「あきた」という叙述が多く使われている。その他、「両親の夢を見たことをきっかけに」両親や村が恋しくなったという叙述も見られる。

◇両親の夢を見て帰りたくなる絵本：②⑤⑩

\*②では、その箇所の叙述を次のようにしている。

「アルヒ浦島ハユメヲミマシタ。オトウサントオカアサンガハマヘデテ……。  
 (中略) ソノユメヲミテカラトイフモノハ浦島ハオイシイゴチソウガデテモ  
 オモシロイウタヲキイテモミンナツマラナクテマイニチカンガヘコンデバカ  
 リキマシタ。ウチヘカヘリタクナツタノデス。」

◇あきたり退屈になったりして帰りたくなる絵本：①③⑤⑨⑫⑬⑰

あきたり退屈になったりしたという内容は同じであるが、次のような叙述も見られる。

- ③おどりにあきてかめをたすけたはまべをおもいだしました。なつかしいなつかしいふるさとのおおいまつばやしのきらきらひかるはまべ
- ⑫時々昔の一人ぼっちで、一生懸命お魚をとって働いていた頃のことになつかしくて  
 (中略) 浦島さんは、竜宮城もいいところだけど、やっぱりあの松の木の下の小さい  
 おうちもよかったと思うようになって来てね。遊んでいても、御馳走をたべてい  
 も、あんまり楽しくなくなって来たのよ。それで浦島さんは、時々淋しそうな顔をす  
 る…… (この絵本には、つまらなさそうな挿絵がある。)

教科書では、「働きたくなった」の内容は見られたが、絵本ではそのような具体的な叙述は見られなかった。上記のものは、村の風景や自分の住んでいる村の様子をも懐かしく思うという内容である。このようなところに、故郷のよさを子ども達は感じるのではないだろうか。

### (3) 玉手箱を渡す場面の違いについて

教科書教材「浦島太郎」では、玉手箱を渡す乙姫は「決して開けないように」と忠告している。絵本の多くも開けないようにという注意を述べているが、⑥だけは、「かなしいときにおあけになるといい」という内容となっている。

### (4) 月日の叙述の違いについて

教科書では、[国定5][暫定]のみが竜宮城の生活を「三年」としている。しかし、地上に戻ってきてからの時間については触れていない。

絵本で時に関する叙述は、大きく3つの内容で示されている。

◇竜宮城での生活3年、地上では300年：②⑤⑬

◇竜宮城での生活1ヶ月、地上では300年：⑫

◇「何十年も何百年も」と竜宮城の生活を振り返っており、具体的な数字での叙述はない。：⑥

教科書と絵本との違いを見ていくことは、子ども達にとっても新しい発見であり、「どうして違うんだろう」という興味がわいてくるものと思われる。年月によって内容に変化をも

たらしながらも、それでいて長年伝えられ、そして、現代においてなおみんなに親しまれている作品と出会うことは、子ども達にとっても驚きであり、その作品のもつ魅力をそれぞれの学年発達において感じ取ることができるのではないだろうか。「驚きをもって作品と出会う工夫」が、このようなところからも生み出せるのかもしれない。

#### 4. 教科書教材「浦島太郎」の教材価値

教科書教材「桃太郎」は、五大昔話として有名である。そして、戦前の教科書に多く採録された教材でもある。『国定教科書編纂趣意書』<sup>9)</sup>の小學國語讀本尋常利用巻一には「『兎と龜』『獅子と鼠』『桃太郎』の三篇の説話を、省略しない形に於て載せた。」とある。しかし、戦後、「桃太郎」が「軍国主義」をイメージさせるとして教科書教材からその姿を消し、今日に至っている。

松谷みよ子は、『民話の世界』<sup>9)</sup>の中で、次のように述べている。

現代においても民話を再話再創造する私たちの思想性の問題もあるわけで、権力によって歪曲された民話を本来の姿に正していく作業と同時に、その正し方が、本当にそれでよいのかという虞れをつねに持つていなくてはいけないのではないだろうかということなのだ。長い歲月語り継がれた民話には、現在の私どもの都会化された、小さな考えだけではおしはかれない、どろどろした部分がある。もしそこを忘れると、その時その時の時代に迎合し、「軍国桃太郎」が一転して「民主主義桃太郎」になりかねない。岡山の人々がひっそりと、食っちゃあ寝の桃太郎を軍国主義とも民主主義とも思わず語り継いできた心、そこを大切にしなければならぬと思うのである。

本来、国語の力を付けるべく活用される教科書教材であるが、時として時代に翻弄され、時代が創り上げたイメージや時代が求める姿に染められてしまう、その一例が「桃太郎」だと言える。

このように見ていくと「浦島太郎」は、国定国語教科書の時期及び昭和20年代の教科書にも採録されている。

そこで、本章では、「浦島太郎」がどのような役割を担い採録されていたかを見ていくこととする。

「浦島太郎」が国定国語教科書に登場したのは、第2期からである。「ムカシウラシマ太郎トイフ人ガアリマシタ。」から始まっている。第2期の社会的背景について海後宗臣は次のように述べている。

第2期国定読本出現の社会背景に、日露戦争勝利にともない国粋主義の強まりがある。

一方、戦後の社会情勢には不安と混乱が見られ、(中略)社会の不安と混乱にあって、(中略)国民精神の強調を説いた<sup>9)</sup>。

国粹主義への強まりとともに、国への思いをより強めていくこのような社会背景の中で「尋常小学読本」は発行されたのである。『国定教科書編纂趣意書』<sup>10)</sup>によれば、「浦島太郎」採録について、次のような文言が見られる。

#### 第四章 材料 三

多クノ國民的童話・傳説ヲ加ヘタルコトモ亦新讀本ノ一特色トスル所ナリ。第一巻ヨリ桃太郎・猿蟹合戦・牛若癩慶・瘤取、餅ノ的、天神様・花咲爺・野見宿禰・義家・浦島太郎・仁田四郎(中略)釜盗人等、人口ニ膾炙シテ趣味アル説話ヲ加入シタリ。  
(補：波線筆者)

日本五大昔話である、桃太郎・猿蟹合戦・花咲爺とともに、浦島太郎は、「国民的童話・傳説」「趣味アル説話」として、第2期に登場したのである。つまり、より親しまれている昔話、国への思いを醸し出す昔話として、この時期に採録されたと言える。第2期以降、国定国語教科書のどの時期にも、「浦島太郎」は採録され続けたのである。

第3期『国定教科書編纂趣意書』<sup>11)</sup>には、「試ミニ本書ノ各課ヲ教材の性質上ヨリ類別スレバ」とあり、「うらしま太郎」を、「歴史的教材」(歴史的教材……史譚・童話・傳説ノ類ハ總ベテ之ヲ歴史的教材ノ中ニ加フ。)<sup>12)</sup>に入れている。また、「教材出處摘要」では、第十四課「うらしま太郎」ハ在來ノ童話<sup>13)</sup>としている。

第3期の社会的背景、そこから生まれた教科書の特徴を海後宗臣は、次のように記している。

◆第一次世界大戦後の後、海外より新しい教育思想が入ってきた。これがいわゆる新教育運動であって、わが国の教育界に大きな影響を与えている。児童中心主義の教育がその特質の一つで童心主義的な童謡、童話が多く創られ、文芸教育が強調されたのである<sup>14)</sup>。

◆大正の経済の発展、国民生活の向上、さらに国際間の緊密化などのために、市民社会的教材、国際的教材が多くなっている<sup>15)</sup>。

大正デモクラシー期、ミリタリズム的な内容が少ないこの時期に採録された「浦島太郎」は、子ども達にとって馴染みやすく、児童中心主義にふさわしい作品として、取り上げられたと言える。そして、軍国主義的な内容や思想的な内容を含まない教科書教材として捉えられていたと言えるのではないだろうか。

第4期『国定教科書編纂趣意書』<sup>16)</sup>によれば、「第二十四課『浦島太郎』は、尋常小学国語讀本卷三所載のものに修正を加へたものである。」とある。



第4期の特徴として、海後宗臣は次のように述べている。

国民的教材が多くなっている。(中略) また、国民文学に関するものが多くなる。これは、満州事変以後、強くなってきた国粹主義思想の影響といえよう。とくに、文学教育の重視とあいまって、国民的童謡、童話、伝説、古典が多く提出されるようになった。(中略) この期の読本は、それ自身、国家主義的な色彩を強く現わしていたというより、国家主義的なものへ向かう素地を多くもっていたというべきである<sup>17)</sup>。

また、唐澤富太郎は、この時期の国語教科書について、次のように述べている。

- ◆国語を民族的なもの結びつけて説明し、国語を民族の言語、国民の魂の宿るものとして、その力を強調している<sup>18)</sup>。
- ◆文学的教材をはるかに多く採り上げ、説話、寓話、童話などを重視して、児童の心理に適應した教材が多くなつた点は見逃すことは出来ない<sup>19)</sup>。

さらに、第4期では、五大昔話が全て採録されている。井上越によれば、『牛若丸』『浦島太郎』は我国古来の伝説であり<sup>20)</sup>としている。

この時期五大昔話全てが採録され、「浦島太郎」も採録されている。「国民的童話」「民族的なもの」「児童の心理に適應した教材」そのイメージの中で採録されたと考えられ、『浦島太郎』は我国古来の伝説として、古くから日本に伝わる伝統文化としてその価値を認められていたとも言えるのではないだろうか。そして、それは、古典につながる教材としても位置付けられたのではないだろうか。

第5期の国定国語教科書の特徴を唐澤富太郎は、「超国家主義、軍国主義の強化宣伝<sup>21)</sup>とし、「浦島太郎」の教材については、次のように述べている。

- ◆「シタキリスズメ」や「モモタロウ」(以上『ヨミカタ』一)や「サルトカニ」「花サカヂイ」(以上『ヨミカタ』二)などの純粋な童話から、やがて「うらしま太郎」(『ヨミカタ』三)「早鳥」「羽衣」(以上『よみかた』四)の伝説が連撃し、「国引き」(『よみかた』三)「白兎」(『よみかた』四)などの神話へと展開して、児童に歴史的世界を知らせるのである。このように第一期(初等科一・二学年)の国語読本の主眼点は、国家主義的意識、敬神崇祖の観念、神国思想、伝統的精神などを、決して理念的に注入するのではなく、どこまでも国語の力から、その文学的な表現力によって児童の心に感動的に与えようとしているのである<sup>22)</sup>。

また、相川仁童は第5期の内容面の特徴を次のように述べている。

その内容はいちじるしく戦時体制化するとともに軍国主義・超国家主義的となり神国としての日本を全面におし出して来るようにかわったのである<sup>23)</sup>。

『ヨミカタ一』『ヨミカタ二』：純粋な童話→『ヨミカタ三』『よみかた四』：伝説→『よみかた三』『よみかた四』→神話への発展といった発達段階に応じた指導の中で、軍国主義の思想を植え付けていくそして、「神国としての日本」を意識付けていくという点において、「浦島太郎」の役割は、軍国主義・超国家主義の思想を植え付けるための、一つのステップとして活用されたのではないだろうか。奈良時代から続く「浦島太郎」を多くの人が知っている、語り継がれた日本の伝説としての魅力、言い換えるならば日本人の心に残る作品を通して、日本人であることに帰依する、日本人であることを改めて確認する伝説は、時代の要求によって、それを蘇らせ意識付ける一つの要素として、活用されたと言えるのではないだろうか。このような意味において、当該学年の単元の配列並びに系統的な単元配列による教材のつながりによって、また別の意味の力が働くと言えるのではないだろうか。

さらに、唐澤富太郎は、教師用書の解説<sup>24)</sup>にそれが見えることを指摘している。

日本の古来の童話もそのとり上げ方が多少異なつて来ている。以上に示す「シタキリスズメ」「モモタロウ」（以上『ヨミカタ』一）「サルトカニ」「花サカヂダイ」（以上『ヨミカタ』二）「うらしま太郎」「牛わか丸」（『よみかた』三）の教師用書の解説には、いずれも超国家主義への奇妙なこじつけが見られる<sup>25)</sup>。

昭和20年8月終戦に伴い、連合軍側より教育についての指令が発せられ、教科書も再検討する必要が生じた。削除、訂正を要求され、削除部分は墨で消すという所謂「墨ぬり教科書」がそれである。しかし「浦島太郎」は、墨ぬりの対象<sup>26)</sup>とはならなかった。つまり、国家主義や軍国的な思想を表立って主張するような教材ではなかったということである。今一度〔国定5〕と合わせて考えるに、「浦島太郎」そのものは、日本の伝統文化を継承する、それによって日本をより意識する作品である。しかし、その一方で、この時代軍国主義へ向かうために、その作品のもつ特性を十分生かしながらそれらを配列することによって意図する方向にもっていくことも可能だということである。「浦島太郎」そのものには、繰り返すが国家主義や軍国的な思想はなくとも、それを意図的に配列することによって、知らず知らずのうちにその役割を担わされるのである。

「浦島太郎」は、「墨ぬり教科書」に続いて、〔暫定〕においても採録されている。

昭和22年、教育基本法・学校教育法が成立し、この年に、「学習指導要領国語編（試案）」が発表された。〔国定6〕及び各出版者から発行された教科書は、この「学習指導要領」に則り、編集されている。「学習指導要領」には、教材に関わる内容として、次のような文言が見られる。

- ◇（低学年前期 一年、二年中期）読みの材料は童話・童詩・感想・記録・子どもしばいの類であるが、いずれもそばくなごく身近な教材によって、しだいに多面的な表現と生活とを会得させるようにする<sup>27)</sup>。
- ◇（低学年後期 二年中期より三年）読みの材料は多面的であるが、これを分類すれば、童話・童詩・感想・記録・子どもしばいの類に関するものになる。これらについてしだいに読書の理解をふかめていく<sup>28)</sup>。

〔国定6〕及び各出版社発行教科書の特徴を唐澤富太郎は、「児童中心の民主的教育へと転回した」<sup>29)</sup> 姿だと言っている。

〔国定5〕も劇の形式をとっているが、〔国定6〕の方が、会話文がより具体的に記されている。これは、「劇教材の多いことも、この自己表現という点と関連して」<sup>30)</sup> いると言える。つまり、「文章表現が会話形式によってなされているのは、戦後における会話教育重視の結果である。演劇一般のむれは、会話のための実例を示したもの」<sup>31)</sup> なのである。この影響が、「浦島太郎」にもあり、劇を通して自己表現を重んじる、そして、それは会話文を多く挿入することによってより効果的に身に付けさせるようにしたのである。児童中心の教科書づくりという点から〈表4〉にあるように、挿絵も多くなり、児童に親しみやすい教科書づくりがなされていると言える。また、唐澤富太郎は、〔国定6〕の教材について、次のように述べている<sup>32)</sup>。

児童中心的教材を増すことは、国語教科書の中に朗々として誦するに足り、終生忘れ難く脳裡に焼き付けられるというタイプの教材が姿を消すという結果をもたらしている。

このような現状の中で「浦島太郎」が採録されていたということは、「児童にとって親しみやすい教材であり、終生忘れ難く脳裡に焼き付けられる教材」でもあると言えるのではないだろうか。

〔学図242・278〕と採録内容が全く同じで、これらの次に発行された〔学図277・278〕対応の「教師用指導書」<sup>33)</sup>によると、「浦島太郎」採録の趣旨について次のように記されている。

#### 一 趣旨

- (2) 劇教材として、それでは、なぜ「うらしまたろう」をえらんだかといえば、この話は、最も広く日本の子ども、いや、日本人の間に読まれ、語られ、歌われていることが一つの理由である。それから、思想的に無難であること、場面の変化が多く、しかも美しいこと、そして、古くから「むかし、むかし、うらしまは」といって、音楽としても歌われておるので、二年生程度の劇教材に好適であるからである。

また、[日書260]教科書の最終頁<sup>34)</sup>には次のように記されている。

『うらしま』のものがたりは、日本の伝説の中では、いちばん無難な教材として選んだのでありますが、さらに、ここに掲げたものは、一つの新解釈として、勤労の楽しみを教え、無為に日を過ごすことが決して楽しいものではないことをおのずから悟らせるように作ったものであります。ご指導の際、この点に特にご留意ください。

両者に共通する「思想的に無難」「いちばん無難」な教材が、戦前・戦中・戦後にわたり、採録されてきたのである。そして、その無難さ故に、逆にその作品に入りやすく、それが戦中の日本国への強い思いをもたせる役割を担ったとも言えるのではないだろうか。

## 5. おわりに ～「浦島太郎」採録の特徴～

「浦島太郎」の採録意図を、以下のように整理してみた。

- ①国民的昔話としてよく知られており、日本を意識する教材として採録された。教材提示では、「浦島太郎」を知っているという前提で学習がなされている面も見られた。
- ②黒塗り教科書の対象ではないことから、思想的な偏りがなく、①に挙げたように国民的昔話として、採録された。
- ③奈良時代から伝えられ、古くから知られている昔話、さらには古典教育につながる教材として、採録された。
- ④提示の仕方によって、会話文を増やしたりしながら物語に変化をもたらすことができる教材として採録された。また、内容的に手を加えることができるという面と話す力を付けるための教材として採録された。
- ⑤日本人としての思い、父母・村・勤労・生活の充実等大切にしていけることを伝えることができる教材として採録された。
- ⑥「浦島太郎」そのものには思想的なものはないが、軍国主義的な思想を意識付けるためのステップとしての役割を担うために採録された。

「無難」な教材「浦島太郎」。しかし、そのような作品でさえ、時代の中で曲げて活用されるのである。時代の要請に応えるべく教科書教材は位置付けられてきたのであるが、国語科としては、学習材の魅力を味わいながら、その学習材を通して、当然のことではあるが言葉の力を付けるべく指導にあたることが大切である。そして、指導の方法は多種多様であるが、例えば、いくつかの学習材を比較し、伝承文学の特徴や地域に生きる文学について、さらに、日本人として、日本文学にどう向き合うか等小学校低学年段階から昔話等に触れる中で考えさせていきたいものである。

付記するが、古くから語り継がれ現代につながる古典と言える「浦島太郎」をモデルに

して、小学校から中学校への古典教育の系統的指導を明らかにすることは、発達段階を踏まえた古典指導の在り方、学習材の活用及び学習材の関連付け方等につながると考える。

古典が語り継がれるように、古典指導の在り方も系統付けて生涯教育にまで結び付けて考えていきたいものである。

## 注

- 1) 波多野完治「育児絵本のあたえ方」(浜田広介『うらしまたろう』小学館 1955)
- 2) 文部省『昭和二十二年度(試案)学習指導要領国語科編』中等学校教科書株式会社 1947.12.20
- 3) 中川邦明他2「大学教育の視点から見た初等・中等・科学教育—教科書を手がかりとして—」(『常葉学園大学研究紀要・教育学部』) 2004 p378
- 4) 調査対象絵本(次頁参照)
- 5) 安倍秀雄『「浦島太郎」の与え方』(徳永壽美子『浦島太郎』講談社 1937)
- 6) 島内景二「昔話の原型」(『国文学』至文堂 1989.9 p58)
- 7) 中村紀久二『復刻版 国定教科書編纂趣意書 第六巻』国書刊行会 2008.9.25 p128
- 8) 松谷みよ子『民話の世界』PHP研究所 2005.12.3 p157～p158
- 9) 海後宗臣『日本教科書体系 近代篇 第九巻 国語(六)』講談社 1964.1.10 p595
- 10) 中村紀久二『復刻版 国定教科書編纂趣意書 第二巻』国書刊行会 2008.9.25 p26～p27
- 11) 中村紀久二『復刻版 国定教科書編纂趣意書 第三巻』国書刊行会 2009.9.25 p13
- 12) 11に同書 p13
- 13) 11に同書 p31
- 14) 9に同書 p602
- 15) 9に同書 p606
- 16) 中村紀久二『復刻版 国定教科書編纂趣意書 第六巻』国書刊行会 2009.9.2 p160
- 17) 9に同書 p613
- 18) 唐澤富太郎『教科書の歴史』創文社 1956.1.31 P453
- 19) 18に同書 p459
- 20) 18に同書 p462(注20は、注18の書より引用した。)
- 21) 18に同書 p481
- 22) 18に同書 p519
- 23) 相川仁童『復刻 墨ぬり教科書 解説』大空社 1985.8.10 p17
- 24) 仲新他2『近代日本教科書教授法資料集成第六巻 教師用書2国語編』東京書籍 p168～p171
- 25) 18に同書 p526～p527
- 26) 23に同書 参照
- 27) 2に同書 p45
- 28) 2に同書 p46
- 29) 18に同書 p643
- 30) 18に同書 P646
- 31) 9に同書 p632
- 32) 18に同書 p644

(注4) 調査対象絵本 ～大正11年から昭和28年に発行された絵本「浦島太郎」～

No.	発行年	備考	書名	文	絵	発行者
①	1922	T11	児童劇脚本	片岡魯月 // 作		明治図書 (児童劇研究会編)
②	1937	S12	浦島太郎	徳永壽美子 // 文	笠松紫浪 // 繪	大日本雄辯會講談社
③	1947	S22	うらしまたろう	中尾彰 // 著		育英出版
④	1948	S23	浦島太郎			榎本書店
⑤	1949	S24	浦島太郎	徳永壽美子 // 文	笠松紫浪 // 繪	大日本雄弁會講談社
⑥	1949	S24	浦島太郎	新井八郎 // 作		日本絵本社
⑦	1949	S24	うらしま太郎		川島はるよ // 画	むさし書房
⑧	1950	S25	うらしまたろう	高野てつじ // 著		ひばり書房
⑨	1950	S25	うらしまたろう	土家由岐雄 // 文	高島華宵 // 繪	永晃社
⑩	1950	S25	うらしまたろう	大谷秀観 // 著		キング
⑪	1950	S25	うらしまたろう	西田稔 // 文	米内穂豊 // 繪	児童図書出版社
⑫	1951	S26	浦島太郎	中谷宇吉郎 // 著	藤城清治 // 影繪	暮しの手帖社
⑬	1952	S27	うらしまたろう	奈良次雄 // 著		トモブック社
⑭	1952	S27	うらしまたろう	羽室邦彦 // 著		若木書房
⑮	1952	S27	浦島太郎	土家由岐雄 // 文	古藤幸年 // 繪	永晃社
⑯	1953	S28	うらしまたろう	岩本みどり // 文	長谷川露二 // 繪	寿書房
⑰	1953	S28	浦島太郎	土家由岐雄 // 文	古藤幸年 // 繪	永晃社
⑱	1953	S28	日本昔話集2	徳永壽美月 // 文	笠松紫浪 // 繪	講談社

33) 教育図書研究会『二年生のこくご上・下 指導書』学校図書 1957 p86

34) 青少年文化の会『山本有三編集 国語2年の2』日本書籍 1951.6.15 p76